

2021年3月期 第3四半期 決算電話カンファレンス 主な質疑応答記録

日時:2021年1月29日(金)12:00 ~ 13:00

出席者:取締役 常務執行役員 経営企画本部長 杉村 英男
広報・IR グループリーダー 小林 太郎

1. 個別の製品について

Q1:ライフアメニティーのプラスチックレンズ関連材料、歯科器材、エイアンドティーについての状況を教えてください。

A1: プラスチックレンズ関連材料は夏場ぐらいから輸出が下げ止まっており、引き続き順調にいくと見えます。歯科器材は新製品(オムニクロマ)の評価が高く、国内・欧米とも堅調に伸ばしていきたいです。エイアンドティーについては、完全子会社化した目的のひとつは、トクヤマのケミカルとの積極的な融合です。試薬や検査機器についても研究の連携を深めて、中長期的に競争力・事業の拡大を図っていきたいと考えています。

Q2:多結晶シリコンは数量が出ているのに増益幅が多くないように感じます。今後もこの傾向が続くのでしょうか。来年に向けての数量、価格の交渉はどうなっているのでしょうか。IC ケミカルは数量が増えていますので今後も利益が増えていくのか。

A2:多結晶シリコンについて数量は通期で前年比1割ほど増加する予定ですが、品質の維持・向上に向けた研究開発投資が発生しています。数量が伸びた分が、そのまま利益の伸びにつながっていません。価格についてはお客さまの構成比によっては変動があるが、来期に向けて改善が図られると考えています。IC ケミカルはIPA、現像液とも数量が活況で品質維持も順調、来期に向けてますます伸びると考えています。

Q3:乾式シリカの今後の見通しを教えてください。

A3:乾式シリカはCMP向けの半導体用途と一般用途があります。一般用途のひとつにコピー機のトナーの帯電防止向けがあり、これがテレワークの影響によりオフィスでのコピー機の利用減少により数量減となっています。しばらくこの状態が続くと思いますが、マーケットで環境の変化があるので、新たな分野向けに新製品の開発を加速しています。

2. 営業利益増減分析の「その他(固定費等)」について(決算説明資料8ページ)

Q4:期首時点では通期の「その他(固定費等)」が対前期比で年間104億円増加の予定でしたが、3Qまではどういう消化率で、通期ではどのくらいになりそうですか。さらに来期以降はどのような傾向になりますか。

A4:期初に説明した104億円増加のうち、約8割が将来に向けての先行投資であり、使途としては設備投資、研究開発、人材補強、経年劣化したプラントの保全などを想定していました。3Qが終わった段階で、これらの項目は約50%の進捗となっています。修繕費と設備投資は実現する段階で、コスト削減を行っています。研究開発はテーマの進捗に合わせスケジュール調整をしているものもあります。人件費はおおむね予定通りです。3Q実績のトータル35億円は、コロナ影響により出張経費や交際費などの経費が期初予定よりも抑えられた側面があります。通期では104億円の6~7割の進捗と考えています。来期以降も将来の成長のための研究開発費や投資に伴う償却費用は増えていくと考えています。

特殊品の投資状況について

Q5:特殊品の各製品で増設をしているが、稼働スケジュールと利益への貢献がいつになるのかを教えてください。

A5:放熱材(窒化アルミニウム)の生産能力の4割増強は完成しており、すでにスタートしている。顧客サイドでの認定から商業運転に移っていき来期は利益貢献して行きます。IPA は先ほど話した通り来期から数量が増加します。昨年増強した現像液の設備はすでに稼働しており、すでに収益に貢献しています。台湾プラスチックとの合弁会社は21年中にプラント完成、22年から稼働が開始する予定です。さらにライフアメニティーの歯科器材は鹿島で増強しており、来期中頃に完成のため、来期下期以降に寄与していく。

自己資本の積み上げと株主還元について

Q6:2018年9月の劣後ローン借り換えから自己資本が順調に積みあがっています。株主還元についてはどう考えていますか。

A6:新中計を策定する過程で今後の設備投資、キャッシュ・フロー、資産構成を見ているところです。その中で、財務の大きな課題として劣後ローンの償還があります。足元の利益が増える中で、CO2削減の投資も今後必要になってくると考えています。株主還元については整理して新中計発表時にご説明したいと考えています。

以上